〈新任紹介〉

スタンフォードでの感奮

大　矢　禎　一（植物学専攻）

長年使い慣れてきたものに対しては，誰しも愛着をもってくるものである。身の回りのもの，たとえば愛着の出てきた茶碗がすこし欠けたくらいで，すぐに新しいものと変える人はあまりいないだろうし，その欠け具合で逆に自分のものだと認識することもある。住めば都という言葉どおり，大学院学生の頃から10年間，同じ研究室で研究してきた私も，この理学部にだんだんと慣れ親しんできた。周囲の人達の理解と援助があって，十分に自分のやりたい研究をやってこれたように思う。

他の場所で働いたことがなかったこともあって，２年前スタンフォード大学に留学した時には，それまでの研究環境との違いにつくづく驚いたものである。新天地で研究を始めて間もない頃，夕方６時半ごろ実験をしていると，留学先の教授に，どうしておまえはこんなに夜まで実験をするのか，と注意された。思わず学生実習の頃のことを思い出してしまったが，それは，夜まで実験するのはカリフォルニアの流義ではないということらしい。たしかに夜おそくまで大学の研究室で研究しているひとたちも，そこにはいないわけではないが，大半の研究者はもうその時間に家に帰っていて，夜７時を過ぎて廊下を往来しているのは，ほとんどモップがけの掃除をしている清掃員だけである。スタンフォードでは，研究者が朝早くから夜遅くまで身を粉にして働くという，ブルーカラーは似合わない。キャンパス内にトム・ワトソンが育ったゴルフコース，ジョン・マッケンローが戦っていたテニスコート，今度のサッカーのワールドカップが開かれるメインスタジアムなどを有するその大学では，いかに生活を楽しんでいるかはみんなと語り合えても，あくせく夜中まで働いていることは，人前ではとても恥ずかしくて言えない。もっともこれはカリフォルニアに限らず，その国民の共通の意識かもしれないが。

大学にいる間の限られた時間の中で，研究者が密度の濃い研究活動を行なえるために，スタンフォード大学では，相当程度の組織上，運営上の工夫をしている。まずは徹底した仕事の分業。完全ＯＡ化している事務部では余裕のある人員を確保し，教育・研究のバックアップ体制がしっかりとしている。まずそのおかげで，かなり研究環境がよくなっている。研究体制の面でも，工夫がみられる。ペプチドやＤＮＡの合成や配列決定などのオートメーション化できうる実験の多くは，独立の部局がそのために設けられており，実験は委託の形で行われる。学部で共通に持つ機器の充実も見逃せない。これらの共通機器は，建物や部屋の設計当初から考えに入れられて計画に組み込まれており，無駄なく配置され，専任の人にしっかり管理されて，効率よく使われている。運営面では，研究室ごとに，いわゆるラボ・マネージャー，テクニシャン，手伝いの学生，器具洗いの人などの多くの人達が，研究者を非常によくサポートしてくれている。大学院生も，全員が返済

義務のない奨学金をもらっているので，アルバイトの必要はなく，研究活動に集中できる。事務部だけに限らず，研究室内でＯＡ化もずいぶんと進んでいる。すべての机には，コンピューターの端末がはじめから取り付けられており，どこの机からでもキャンパス内外の情報収集，物品の注文，文献検索が容易にできる。驚いたのは学部内の会議がほとんどないこと。Department 制ということもあるが教授会は年に１回，その他の特別委員会などもまったくない。ただその分 Chairman に責任と権力が集中している。

日本にいると，研究者が一日のなかの長い時間をさいて，自分でやらなくてはならないこまごまとした多くのことを，スタンフォードではやる必要がなかった。もちろんこれは先立つものがなければ導入できないシステムではあるが，その裏には科学に対する根本的な考え方の違いがあるような気もする。学校（school）の語源はギリシャ語の schole であるが，これはそもそも「余暇」という意味を持っている。西洋では，科学の自由な発想，自然への探究心は，日々の過酷な労働，作業とは逸脱したところでのみ生まれ得たということであろう。これこそがキャンパスでウインドサーフィン，ヨットのセーリングの講習会を開いている人達の発想の源である。優れた知的作業を行うためには，心を落ち着かせて，いろいろと考えを張り巡らせてみる時間をまず大事にしているのである。一方で，帰国してから改めて観察してみても，私の周りにいる人達の中で，暇そうにしている教官は，残念ながら見当たらない。本当に朝から晩までよく働いていると，感心するばかりである。

さて，連中はそうしてできた暇な時間を何に使っているかというと，答えはさまざまである。そのなかでも，人とのコミュニケーションに費やしている時間が多いと，ひとつには感じた。間違いなく，よく議論をしている。時にはオフィスで，時にはランチルームで，研究室の分け隔てなく，いろんな人と，いろんなアイデアを交換しあっている。アメリカの大学ではセミナー，研究集会が多いのは有名だが，多いときなどはキャンパス内の生物系のセミナーだけで１日に10回以上も開かれていることもある。それだけ他の大学，研究所の個性豊かな研究者に巡り会う機会も多く，貴重な夕刻のひとときを迎えることも幾度もあった。

有意義だった２年間の留学を終えて，植物学専攻の教官の一人として大学院理学系研究科に戻ってみると，以前にも増していろいろなことを考える。理学系研究科の一部が柏キャンパスに移転する計画が進んでいる中で，よりよい理学の研究環境とは何であるかを，これから暇な時間を作って，さらに考えていきたい。